

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 5月15日現在

機関番号：84602

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2009～2011

課題番号：21720291

研究課題名（和文） 朝鮮半島三国時代の倭系遺物を副葬する古墳被葬者に関する研究

研究課題名（英文） A study on the deceased person in the Tumuli that was buried along with the Japan-originated artifacts in the Three Dynastic Period of Korea.

研究代表者

井上 主税（INOUE CHIKARA）

奈良県立橿原考古学研究所・調査部・研究員

研究者番号：80470285

研究成果の概要（和文）：本研究では、朝鮮半島三国時代の加耶諸国において、倭系遺物を副葬する古墳の被葬者像について考察をおこなった。その結果、これら古墳の被葬者が倭人と断定できるものではなく、加耶諸国のなかでも、倭系遺物の内容やその時期に大きな違いがあることが明らかになった。また、倭系遺物を副葬した加耶諸国の首長墓には倭系のみならず、北方や新羅、百済と関連する外来系遺物が多く認められた。

研究成果の概要（英文）：In this study, I discussed the characteristics of the Tumuli that was buried along with Japan-originated artifacts in the Kaya, Three Kingdoms Period of Korea. As result, I cannot conclude that the person buried in this grave is a Japanese person. Within the Kingdoms inside Kaya, the major difference is found in the variety, details and time period of the Japan-originated artifacts. In addition, the chieftain of Tumuli in Kaya was buried along with the Japan-originated artifacts. However, not only the Japan-originated artifacts but exotic artifacts related to area in the north of China, Silla, Baekje were also observed in the grave.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	500,000	150,000	650,000
2010年度	300,000	90,000	390,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1300,000	390,000	

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・考古学

キーワード：倭系遺物、古墳被葬者像、三国時代（朝鮮半島）、階層性

1. 研究開始当初の背景

古墳時代における朝鮮半島との対外交渉を考古学的に検討する場合、日本列島出土の朝鮮半島系遺物だけでなく、朝鮮半島出土の日本列島系遺物、いわゆる倭系遺物に関する評価を避けて通ることはできない。なかでも、朝鮮半島東南海岸の金海および釜山地域を含む嶺南地方では、新石器時代から絶えるこ

となく日本列島との交流関係が続いており、古墳時代における日韓交渉を考えるうえで非常に重要な地域といえる。それゆえ、研究代表者は従前よりこうした観点に立ち、金海および釜山地域を中心とする古墳から出土する倭系遺物に対する評価を積極的にを行い、古墳時代前期から中期初めにかけての日韓交渉に対する考古学的検討を実施してきた。

倭系遺物に関する研究が始まってから 30 年近くになり、これまで多くの関連成果が蓄積されている。また、近年の韓国における発掘調査の進展が新出資料の増加をもたらしている。

しかし、このような状況のなかで、倭系関連資料の通史的かつ総合的な検討は現状では十分とはいえない。

特に、倭系遺物を副葬する古墳被葬者については、朝鮮半島西南部の栄山江地域に分布する前方後円墳や、倭と関連する石室を埋葬主体とする古墳に関して倭人なのか、在地首長なのかといった出自や性格に関する議論が活発になされているものの、加耶や新羅地域の倭系遺物を副葬する古墳の被葬者像に関する研究は、ほとんど進展していない状況にあった。

2. 研究の目的

前項のような先行研究における問題点を解決するために、本研究では朝鮮半島出土の倭系遺物を対象として、研究代表者がこれまでおこなってきた基礎的研究をベースに、朝鮮半島における倭系遺物を副葬する古墳被葬者の性格や特質について考察することを目的とした。その際に、韓国考古学の視点からの評価もふまえ、三国時代における倭系遺物の考古学的・歴史学的位置付けを明らかにしようと試みた。

3. 研究の方法

まず、井上主税 2006 『嶺南地方出土の倭系遺物からみた日韓交渉』（慶北大学大学院 博士学位請求論文）の中で扱った関連資料以外の新出資料の収集を行い、データの整理を実施した。

また、韓国の埋蔵文化財関連機関を訪問することで、新出資料の有無を確認し、研究動向についても意見交換をおこなった。

新出資料に関しては、所蔵機関にて細部を含めた写真撮影および観察調査をおこなった。

そのうえで、三国時代の古墳に副葬された倭系遺物を再精査するとともに、共伴する副葬品に関する分析や出土古墳の評価も含めた総合的な検討を通じ、倭系遺物を副葬する古墳被葬者の性格解明を目指した。

最終年度には、一連の研究成果を整理したうえで、研究成果報告書を、平成 24 年 3 月 31 日に奈良県立橿原考古学研究所から刊行した。

4. 研究成果

加耶諸国（金官加耶・大加耶・小加耶・阿羅加耶）において倭系遺物を副葬する古墳被葬者の特質について、特にその階層性について考察をおこなった。

その結果、まずこれら古墳の被葬者が倭人と断定できるものはなく、松鶴洞 1B-1 号墳の被葬者がその可能性を含む程度であることが明らかになった。

倭系遺物の副葬状況をみると、加耶諸国のなかでも、その内容や副葬時期に大きな違いが認められる。例えば、金官加耶や大加耶では、威信財とみられる倭系遺物は王や王族といった首長墓に副葬される場合が多く、日常財である土器については中心古墳にも一部副葬されるものの、その大部分は一般成員も含む階層の低い中小古墳に副葬された。その一方で、小加耶では威信財とみられる倭系遺物はほとんどなく、首長墓には須恵器が多量副葬されており大きな違いをみせる。倭系遺物を通じた分析結果ではあるが、このような違いを積極的に評価するならば、加耶諸国での小加耶の特徴を考えるうえで有用といえる。小加耶地域の古墳は特定の威信財が認められない点や、墳丘先行型である点など、他の加耶諸国との違いが大きく、また栄山江流域の古墳との関連性が強い点も指摘できる。

次に、加耶諸国における倭系遺物の副葬状況と、古墳被葬者の特質についてそれぞれ整理してみたい（表 1）。

①金官加耶

威信財とみられる遺物のほとんどが大成洞古墳群で出土しており、王や王族と考えられる首長墓を中心に副葬されている点が大きな特徴である。おおむね 4 世紀前葉から 5 世紀前葉までに位置付けられる遺物である。ただし、巴形銅器や石製品などから構成された 4 世紀代の倭系遺物が、5 世紀になると韃や鹿角製刀装具などに变化している。また、これらの古墳には倭系のみならず、中国（楽浪）系や北方系の外来系遺物も副葬されており、国際交易に政治的基盤を置く金海地域の政治集団の性格をよくあらわしている。その後、高句麗南征によって大成洞古墳群の築造が中断されたためか、金官加耶では 5 世紀中葉以降の遺物は確認できない。そのなかで、詳細は不明であるが、5 世紀前半代の金海三溪洞杜谷古墳群において、帯金式甲冑である三角板革綴短甲・長方板革綴短甲・横矧板鋌留眉庇付冑が出土している点は重要である。大成洞古墳群築造集団との関係はもちろん、倭の古市・百舌鳥古墳群築造集団との関係が注目される。

②大加耶

中心古墳群である池山洞古墳群に副葬された倭系遺物と、周辺古墳群に副葬された倭系遺物の内容および時期が非常に似ている点の特徴である。ともに 5 世紀中葉から 6

世紀前葉に該当する。このことから、中心勢力である池山洞古墳群築造集団から地方勢力への再分配がおこなわれた可能性が想定できそうである。

③多羅

5世紀前葉に帯金式甲冑がみられる。これは高霊様式土器が本格的に流入する前であり、独自ルートによって入手した可能性が高いと考える。

④小加耶

威信財とみられる倭系遺物がほとんどなく、首長墓には須恵器が多量副葬される点が特徴である。時期的には5世紀前半代にさかのぼる遺物はなく、他の加耶諸国に遅れて5世紀後葉から6世紀前葉にかけて副葬される。この時期は、小加耶地域において新羅や大加耶、栄山江流域といった多様な勢力との交渉関係を示唆する遺物が多くみられる段階である。

⑤阿羅加耶

文献記録にみられる倭との親縁性とは対照的に、倭系資料の全体量が少ない点が特徴である。そのなかで、最上位階層である道項里4号墳から直弧文が刻まれた鹿角製刀装具が出土している点は重要といえる。類例は、金官加耶の大成洞12号墳において確認することができる。

加耶諸国	4C	5C	6C
金官加耶	■	■	
大加耶		■	■
多羅		■	
小加耶			■
阿羅加耶		■	■

表1 加耶諸国における倭系遺物の副葬状況

最後に、倭系遺物を副葬した加耶諸国の首長墓には倭系のみならず、北方や他の加耶諸国、新羅、百濟（栄山江流域を含む）と関連する外来系遺物が多く認められることも重要である。このことは、当時の複雑な交渉関係を物語るものであり、遺物の流入ルートもまた単純なものではないことをあらわす。当

然のことながら、これまで述べてきた古墳被葬者の性格を考える際には、日本列島と関連する遺物にのみ注目するだけでは不十分である。いいかえれば、倭系遺物を副葬する古墳の被葬者像を考察するにあたっては、当時の国際情勢もふまえた総合的な視点が必要である。今後、倭系のみならず、他の外来系副葬品についても検討することが新たな課題との認識にいたった。

朝鮮半島出土の倭系遺物は、古墳時代の対外交渉を研究する上で欠くことのできない重要な資料であり、その学術的価値はきわめて高い。これら倭系遺物を韓国考古学の中に位置付け、評価していくことが必要である。今回は加耶地域を対象として、倭系遺物を副葬する古墳被葬者に関する分析をおこなったが、今後は新羅地域や、倭系の石室や前方後円墳が分布する百濟および馬韓地域においても同様の作業を進めていきたい。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 5件）

①井上主税、勒島遺跡と対外交渉、季刊考古学113、査読無、2010、52-55頁

②井上主税、朝鮮半島三国時代倭系遺物を副葬する古墳の被葬者像について—加耶諸国の例—、勝部明生先生喜寿記念論文集、査読無、2011、392-403頁

③井上主税、泗川勒島遺蹟の衰退—その歴史的背景について—、慶北大学校考古人類学科30周年紀年考古学論叢、査読無、2011、247-268頁

④井上主税、朝鮮半島における角杯の導入と展開過程について、第18回ヘレニズム～イスラーム考古学研究、査読無、2011、1-9頁

⑤井上主税、狗邪韓国の遺跡群、別冊季刊考古学18、査読無、2012（刊行予定）

〔学会発表〕（計3件）

①井上主税、勒島遺跡の終焉—その歴史的背景に関する考察—、日本考古学協会第75回総会研究発表会、2009年5月31日、早稲田大学

②井上主税、朝鮮半島三国時代倭系遺物を副葬する古墳の被葬者像について（1）、日本考古学協会第76回総会研究発表、2010年5月23日、国士舘大学

③井上主税、朝鮮半島における角杯の導入と展開過程について、第18回ヘレニズム～イスラーム考古学研究会、2011年7月2日、奈良県立橿原考古学研究所

〔図書〕（計1件）

①井上主税、奈良県立橿原考古学研究所、朝鮮半島三国時代の倭系遺物を副葬する古墳被葬者に関する研究（平成21年度～平成23

年度科学研究費補助金 若手研究 (B) 『朝鮮半島三国時代の倭系遺物を副葬する古墳被葬者に関する研究』研究成果報告書)、2012、41 頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

井上 主税 (INOUE CHIKARA)
奈良県立橿原考古学研究所・調査部・
研究員
研究者番号：80470285

(2) 研究分担者：無 ()

研究者番号：

(3) 連携研究者：無 ()

研究者番号：